

三月総評

立花開

詩のない場所で

くつ下のかたほうをみつける

青野 椰栄 東京都

悲しいことに、詩のない場所の方がこの世には多い。毎日を生きるとは、詩から離れることがのかもしない。必死の日々は、床も散らかってゆく。そんな中からすくい上げた荒れた生活のかけらのような、一編詩のような「くつ下」。

音域の届かないミモザになるの

松下 誠一 東京都

ミモザは柔らかくて美しい。風に吹かれている姿には、音楽のような輝きを感じる。けれど、主体は静けさを見出した。美しいほどに無音になる。「なるの」という話しことばは、ミモザの独白にも、主体の淡い夢にも読める。目には見えない音がミモザを掠めて落ちていく。

線香を焚く海亀の目を借りて

山本先生 東京都

海亀の目は、暗くて深い。目というより、何処かへつながる穴に感じる。この世の理の中で生きながら、そこから離れた穴のような眼差しで死者を悼む。いや、離れなければ悼むことができなかつたのかもしれない。時として、死別は人を変える。暗い場所では、線香の光さえ苦しい。

答案用紙

はなびらのように

湿つて

こはくいろ 大阪府

静かな作品だ。本人は気にするのだろうが、汗をかいした手のひらは植物に似た湿り気を持っているように見える。集中し続けたことで用紙が汗を吸ってしまった。そのふやけた様を「はなびらのよう」と描写できる観察眼の鋭さ。「湿つて」の言いさしの余韻に含まれる嫌悪や自己愛が面白い。

背後からスマホを覗く雛人形

うたた 岡山県

気配は、どこにでもある。気がついていないだけで、見ようとしているだけで。本当は氣を抜けないような存在が満ちた空間に生きていることを再認識させられる。人形の姿は変わらないが気配だけが首を前のめりにさせ、目を凝らして見ている。純度が高いゆえに、向けられる側は恐ろしい。

あくびするコバルト色に起毛して

桜庭 紀子 和歌山県

思い切りあくびをしている姿が見える。両腕を空へ突き上げ、大きく口を開けている間、主体はコバルト色になるのだ。「起毛する」というビの生き物にも存在しない動詞がコバルト色と響き合う。どこまでも自由な心と体を解放させている。

三月の醤油をはじく目玉焼

ムクロジ 群馬県

明日は目玉焼きを作ろう、と思わせられる作品。「三月の醤油」は一月にも二月にも家にあつた醤油だろうが、特別なものとして描かれることで旨味が現れる。湯気を立てる黄身の上を流れる醤油の輝き。素朴な作品でありますながら、三月にしか味わえない特別性が存在する。

病窓をテトリスみたいに牡丹雪

木村 菜智 宮城県

入院をしているのか、ゆつたりと焦らすほどに変化のない時間を過ごしている主体。窓の外にのみ活発な命が渦巻く。牡丹雪が窓に付き、重力に従い落ちてゆく。牡丹雪の上に牡丹雪が重なり、またその上にも積み上がる。テトリスと違うのは消えないということ。人生のようだ、感情のような牡丹雪のテトリス。

つるんと寝つるんと起きて春の雲

絵巻 東京都

睡眠には毛がないらしい。眠るときも起きるととも、清潔で可愛らしい。身体感覚が独特で面白く、唯一無二性がある。「つるんと」のリフレインが心地よい睡眠をとっていることを感じさせる。眠る喜びと、起きる喜び。

寝たふりのおもちゃを

全部茹でてみる

内海千智 東京都

実験的に命を弄びたいという、幼少期に手離しているはずの欲求をまだ持つていて、しかも実行してしまう主体。見ている側はやめてあげてほしいと思うが、本心は結果が知りたい。一番恐ろしいのは、無垢ゆえに手を汚すことに抵抗がないことだ。